

One step at a time—
復興へと向かう確かな一歩

災害公営住宅第一号 御船町営住宅古閑迫団地

3月22日、災害公営住宅となる御船町営住宅古閑迫団地（上野）が完成しました。木造平屋の戸建て10戸が青空の下に建ち並び、完成竣工式に参加した人々から喜びの声が上がっていました。団地の入り口のふれあい広場には、あずまや、共同花壇、かまどベンチなど設けられ、コミュニティの拠点となります。藤木町長は「（古閑迫

団地は）地域のコミュニティ力を向上させるために、一本のコミュニティ道路を挟んで、家から家へ行けるようになっている。被災された方々がこの御船町に住み続けていただくために、すべての災害公営住宅を早期に整備できるよう、全力で取り組んでいきたい」と話しました。



1



▲藤木町長から鍵を渡される古閑迫団地入居者の松永幸輝さん（上野）。「（完成して）入居者みなでとても喜びありました。夢みたいです。今後は、団地の入居者たちだけでなく、地域の人たちとの“つながり”も大事にしていきたい」と笑顔で話しました。



3



2



5



4

1.4 広々とし、落ち着いた空間（和室、リビング） 2. 古閑迫団地の前でテープカット 3. 団地の入り口にはふれあい広場 5. トイレには手すりを設置。他にもさまざまなバリアフリーが施されている。

復興へと向かう 確かな一歩



熊本地震から3年—。

平成28年4月14日 21時26分に発生した「熊本地震」。熊本地方でマグニチュード6.5最大震度7の前震、続く16日の1時25分には、マグニチュード7.3最大震度7の本震を記録しました。その後1年間で合計4000回以上の余震が発生するなど、観測史上初めての大地震となりました。

御船町は、震度5強を2回と震度6弱1回の地震に見舞われ、これまでに経験したことのない甚大な被害を受けました。

人々は、震災直後の自然に対する恐怖、家屋や財産を失った悲しみ、前を向いて歩き出す人々の強さ、協力し合って助け合う人の温かさなど、さまざまな感情を体験しながら震災の中を生きてきました。

震災から3年が経ちましたが、未だに震災前の暮らしに戻れていない方々もいます。しかし、地震によって受けた被害の爪痕が減ってゆき、少しずつ復興の兆しが見えてきているのも事実です。

御船町は、復興へと向かう確かな一歩を、今もまた踏み出しています。

“オールみふね”で
復旧から復興へ

御船町長
藤木正幸



未曾有の被害をもたらした平成28年熊本地震の発生から、早や3年を迎えます。この3年間、町民の皆様の生活再建、安心安全な暮らしの確保を最優先として取り組んでまいりました。

主要道路や橋梁、農地の復旧、仮設住宅の整備、そして災害時の情報伝達には欠かせない防災行政無線の整備等、多くを平行しながら進めてきたため、町民の皆様にはご不便、ご迷惑をおかけしたことも多々あったかと思えます。この場をお借りしてお詫言申し上げます。

しかし、皆様のご協力のおかげをもちまして、本年3月18日に御船町防災行政無線システムの落成を迎え、役場3階に

防災対策室を設置し、より迅速で正確な情報を住民の皆様へ伝達することが出来るようになりました。

また、3月22日には古閑迫地区災害公営住宅が竣工の運びとなり、順次入居していただいているところです。他の災害公営住宅につきましても、工事に着手し、早期の完成を目指しています。一歩一歩ではありますが、着実に前へ進んでいます。

「あの日を忘れず、共につなごう未来へ！」復興計画のスローガンの下、今後も「オールみふね」として一丸となり、町民の皆様とともに創造的復興を目指していくことが出来れば幸いです。